

『人と文化の掛け橋』 ～ 苦痛に対する思いやり ～

筆者は、島根県の『遣島使』を仰せつかっている。筆者が生まれ育ったのは島根県出雲市大社町鵜峠である。隣の鷺浦地区と合わせて、鵜鷺(うさぎ)と呼ばれている。【7～9世紀に日本と唐との交流の使者として活躍した『遣唐使』にちなみ、島根県を愛する人に、島根と全国との『人と文化の掛け橋』になっていただきたいという想いをこめて、島根県版のふるさと親善大使を『遣島使(けんとうし)』と命名しました。2025年8月現在、635名(首都圏334名、関西圏134名、山陽圏49名、その他118名)の方に遣島使に就任いただいています。】とのことである。

2025年9月2日、『島根県 政策企画局 広聴広報課 県民対話室』から今年度の『遣島使の名刺』のことで連絡があった。『遣島使の名刺』のデザインに『大国主命と因幡の白兔(うさぎ)の像』(画像)もあると最高であろう！

『因幡の白兔』の話は、幼い時から聞いたものである。【『うさぎ』がある島から本土に帰るときに 道がないから、『ワニザメに 数を数えてやるから 一列に並べ』と言った。『ぴよんぴよん 飛んで 最後の一步で だました』と言った。そして 毛をむかれて砂浜に打ち上げられた。いろんな人が 通りかかったが、『大国主命』が 正しい治療をして治った。これが『的確治療』である。『大国主命』が 『うさぎ』を治すときに、『うさぎ』の『境遇』を問わなかった。『ワニザメ』をだましたから『ざまあ見ろ』とは言わなかった。】

【『最も剛毅なる者は 最も柔和なる者であり、愛ある者は 勇敢な者である。』とは『高き自由の精神』を持って医療に従事する者への普遍的な真理であろう。『他人の苦痛に対する思いやり』は、『医学、医療の根本である』】の復習である！

出雲弁で無口な筆者は、臨床医でなく病理医になった。それが、『がん病理学』→『がん哲学』さらに、幼年期の田舎の診療所のイメージが重なり、『がん哲学外来』の提唱へと導かれた。そして、『がん哲学外来市民学会』(2012年)、『日本地域医療連携システム学会』(2016年)&『日本 Medical Village 学会』(2016年)の設立へと導かれた。『不思議な人生の非連続性の連続性』を痛感する！

